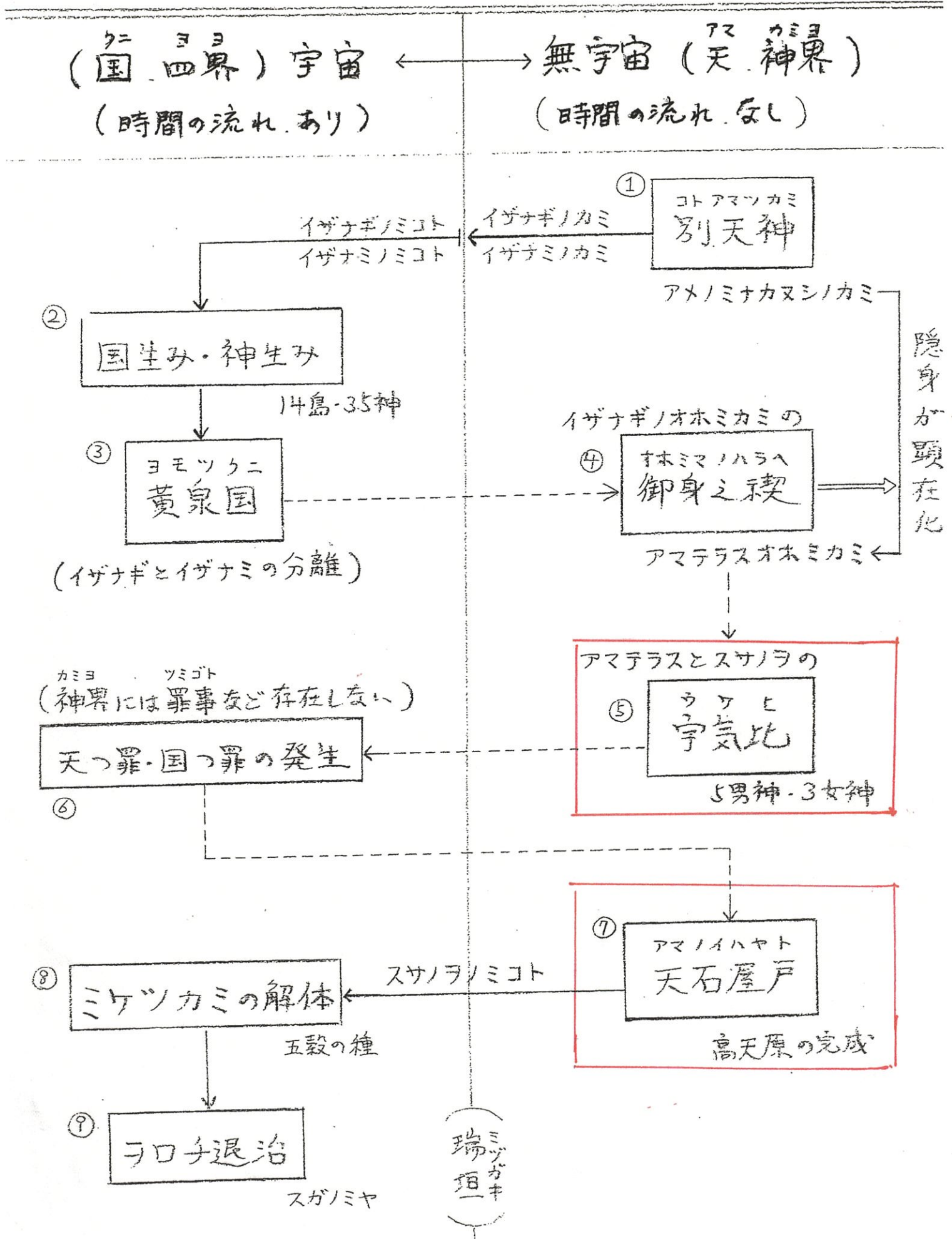


図表：古事記の神話の前半部の構成





## 第七節

御祖神の神挂りと白しますのは、倭の青垣東の山の上の祕事で、天香具山眞賢木比咩の御教で、即、天宇受賣の神挂りなので、我と我が身を齋りて、此の身此のまゝ神の身たる大御齋と成らねばならぬ神儀行事であると、宗教的には白しますが、政治としてならば、萬邦一圓の樂土と成すことで、學問としてならば、その科學たると文學たると哲學たるとを問はず、すべてが神界を發き得べき方圖を明にすることで、藝術としてならば、そこにそのまま、神國樂園を現し得たので、軍務も農産も商工業の如きも、萬般の事業は皆悉く其のまゝに、神の日を拜し、神の國に入り、神と共に住み、神と共に思ひ、神と共に語り、神と共に行ひつつ、やがては、太極の位に於て、一圓光明の零ヒと成るので、それを、誤解することの無きやうにとて、此の零ヒを得るのだと重ねて白すのであります。

自分自身に自分自身を齋祭ると云ふことは、先に擧げた古事記の本文だけでは、或ははつきりとせぬかも知れず、日本紀や常陸風土記などを對讀しても、なほ或はどうかと思はれますが、その身の困つて居る時には、天を呼び、神を求めて止まぬ爲に、おのづから大道を踏みはずすやうなことも無く、事業も正しく進行する。ところが、その順調に進んで居る時に、兎もすれば、心の緩みが出来、身にも隙が出来て、細徑にさ迷ふやうなことが起りがちである。さうなれば、自分自身に、自分自身の主を失ふ。國としてならば、その國の中心を忘れる。つまり、少名彦名命は隠れ去つて、大穴牟遲は、「獨能く巡りて、その國を造り、出雲國に到り、葦原の中つ國は、



図表1.古事記登場順の神名表

No.			
1	天之御中主神	↑ コトアマツカミ (秘天極小)	アマノミナカヌシノ オホミカミは、 こちら側に重点を 置いた神名。
2	高御産巢日神		
3	袖産巢日神		
4	宇摩志阿斯訶備比古遲神		
5	天之常立神		
6	国之常立神		
7	豊瓊野神		
8	宇比地邇神	↑ アマツカミ (巨根大長小)	イザナギノオホミカミ は、この十柱神に 重点を置いた神名。
9	須比智邇神		
10	角杵神		
11	治杵神		
12	意富斗能地神		
13	大斗乃辨神		
14	於母陀流神		
15	阿夜訶志古泥神		
16	伊邪那岐神		
17	伊邪那美神		
18	伊邪那岐命	↓ クニツカミ	(二柱御祖神)
19	伊邪那美命		
20	大事忍男神		
く			
59	豊宇氣毘売神		
			No.20~59.の40神は、 「神生み」で生まれた神々。

1. 天之御中主神
2. 高御産巢日神
3. 神産巢日神
4. 宇摩志阿斯訶備  
比古遲神
5. 天之常立神
6. 国之常立神
7. 豊雲野神

コトアマツカミの領域

莫器園

同じオホミカミである  
「スミカフス」の換形  
着目すると、この神は  
イザナギノオホミカミ  
(エノシカミとイサナギノオホミカミ  
の間に「スミカフス」の換形)

8. 宇比遲邇神
9. 妹須比智邇神
10. 角杵神
11. 妹活杵神
12. 意富斗能地神
13. 妹意富斗乃辨神
14. 淤母陀琉神
15. 妹阿夜訶志古泥神
16. 伊邪那岐神
17. 伊邪那美神

中移  
十柱神  
伊邪那岐大御神  
イザナギノオホミカミ  
内容

莫器園隣

アマツカミの領域

天  
無宇宙

ハ神は=神の内容で=神としてはイザナギノオホミカミ

アマツカミをクニツカミにする  
コトアマツカミのオホセのこと

天神諸命  
アマツカミノオホセ

瑞垣

古事記では  
伊邪那岐命  
伊邪那美命  
となる

アマツカミであると同時にクニツカミでもある → 命とよぶ

クニツカミの領域

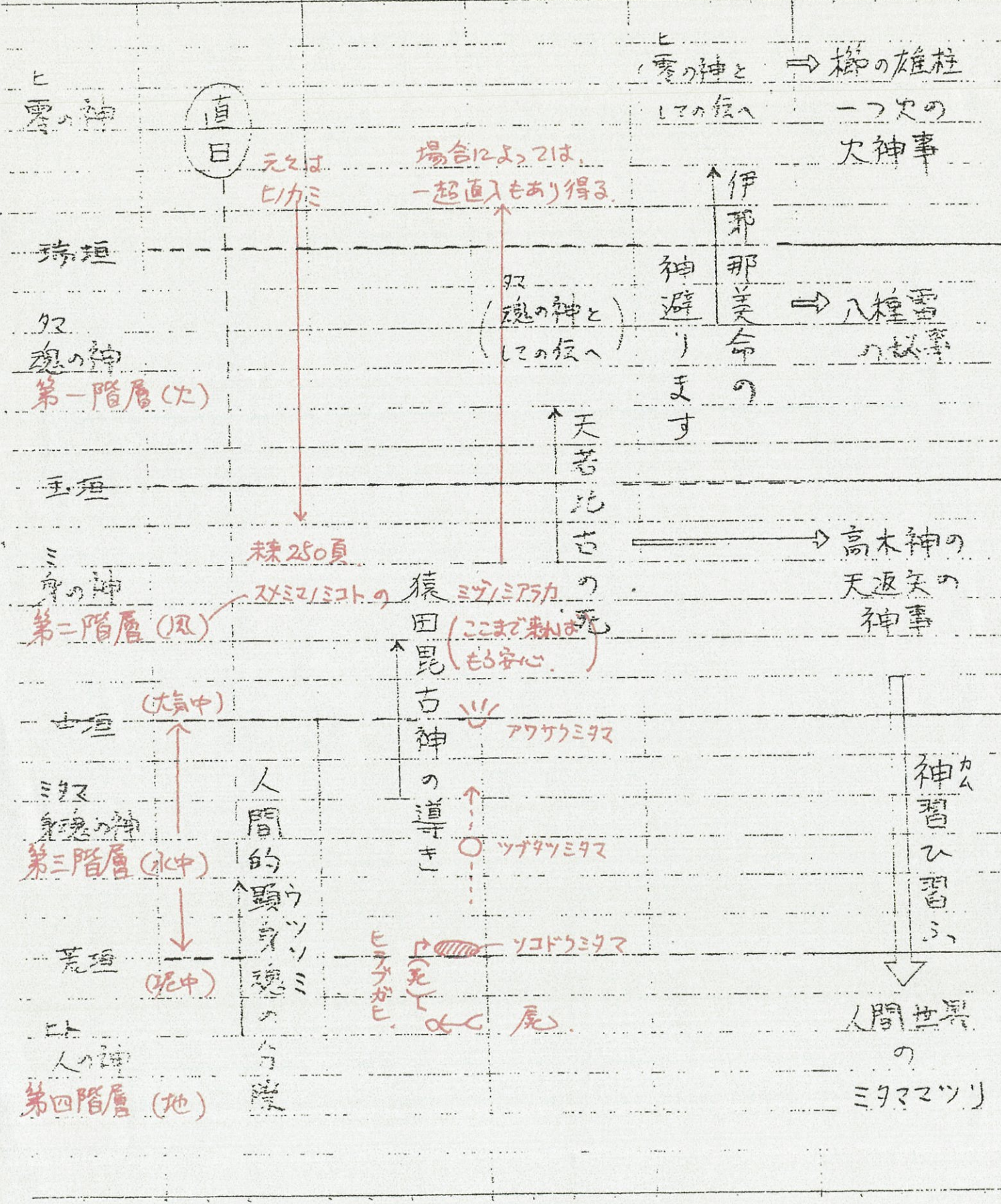
宇宙  
クニ  
(国)

古典では

「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神」と記されているが、  
「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と奉称されなければならない。

(多田流)







之を繰返し繰返し、或は殆んどその大半とも云ふべき程に、さうして、最重大肝要の事として記載して居る。ひとり、日本の古典がさうであるばかりでなく、諸外國の古典も皆共に然うである。私が今ここで古典と白しますのは、「神代紀」を指すので、人間身の生死遷流、さうして、人間世界と各界各宇宙との成壞起滅に關する記録を白すのであります。それで、神代紀たる古典は、其の本來の性質上、神界と魔境との出入往返を主題とせざることを得ないので、常人に對しては、祕事として知らしむべからざることをも記載すると云ふ事になる。けれども、祕事は勿論祕事なのであるから、語ることも書くことも爲ないのが常道であることは勿論である。従つて、古典とは、人間世界に於ては、神殿宮裡の祕書として、ひとり、神宮の神使のみが關與すべきところであることがわかる。さうして、殿内奉祀の御神體と白しまつるは、蓋、此くの如きの古典であり、御神影にてあらせらるのである。故に、此の意味に於て、古典は、常人の讀むべきものではなく、專念一意奉拜すべきである。

古典は、唯一專念拜みまつるべきのみである。ところが、世降り道晦く、群小横議して怪しまざるに到り、人心徒に怪奇を歡び求め、邪慾に溺れ墮ちて、魔神の樓上に喜び唄ひ、邪鬼の巢窟に楽しみ臥し、貪りて屎糞を喰ひ、争ひて汚尿を飲む。人にして人の住居を忘れ、人の飲食を失ふ。事此ここに到つては、彝倫を論じ道義を叫ぶとも、其の耳は既に聾し、彼の目もまた盲せるもので、もはや尋常一樣のことでは何の應驗も現はれない。

魔神でなくては魔界を整理する手段はわからず、邪鬼でなくては邪鬼を教化する方法がつかない。「素戔嗚尊は、頻時、串刺、畔放、溝埋、樋放、伏馬、生剝、逆剝、屎戸、と白すやうなひどいことをなされた」「日神の仰せらるるには、吾弟の上り來ますは必我が國を奪はうとしてであらう。手弱女のわたしではあるが、何うして之を避ることができようか」「月夜見尊が忿然と色を作し、劔を抜きて保食神を擊殺された」等と、古典に記し、

人間世界に、「かみ」と云ふ詞の用ゐられたのは、何時からであらうか。今は、知る由も無いが、現在も日用語であり、種種様様の意味に使用されて居る。支那風の「神」<sup>シン</sup>と混同したり、基督教の「ゴット」とか、各國各地で、宇宙の主宰者と尊稱するに等しい意味に用ゐたり、又は、上<sup>カミ</sup>、頭<sup>カミ</sup>、長官<sup>カミ</sup>、守<sup>カミ</sup>、髮<sup>カミ</sup>、嚙<sup>カミ</sup>、雷<sup>カミ</sup>、神<sup>カミ</sup>、惡神<sup>カミ</sup>、善神<sup>カミ</sup>、魔<sup>カミ</sup>、赫身<sup>カミ</sup>、紙<sup>カミ</sup>、などと、甚多く廣く使用されて居る。之等多種多様の「かみ」は、人間的約束として、各別の語義とされて居るが、音義としては、等しく、「かみ」以外ではない。それならば、其の音義とは何であるか。聽覺の認めた一切を「音」と呼ぶ。此の音には、音自體に意義が有るのだと云ふのが、祖神垂示の音義觀である。其の音義の上から、「かみ」とは、何ういふ意義かと云へば、先づ、口を開いて、「か」と呼ぶ。次ぎには、その開きたる上下の齒を閉ぢ合せ、唇を開いて、「み」の音を出す。それで、「かみ」の二音一語は、開閉である。

開くは陽で、閉づるは陰で、此の二音は、明闇で、天地で、高低で、晝夜で、日月で、乾坤で、善惡で、正邪で、美醜で、凹凸で、賢愚でも、利鈍でも、貴賤でも、利害得失でも、出入往返でも、生滅起伏でもある。經<sup>クラ</sup>には、上下で、緯<sup>ヌキ</sup>には、前後左右で、經緯を兼ねては、内外本末で、一切合切だと云ふことになる。斯のやうに、相對し、或は、相反したる兩者の結合、或は對立、或は鬭爭等が、「かみ」であることは、近代的修飾を施さざる、素樸の「神觀」であり、また、神言靈としての、「かみ」の本義である。

「かみ」の語には、古來「神」の字を充當<sup>ア</sup>てて居る。同じく神を充當てたのに、「かむ」「かん」の二語がある。「かむ」の音義は、「かみ」よりも、閉づることの固きもので、「かん」と云へば、「かむ」の稍開かんとしたるも

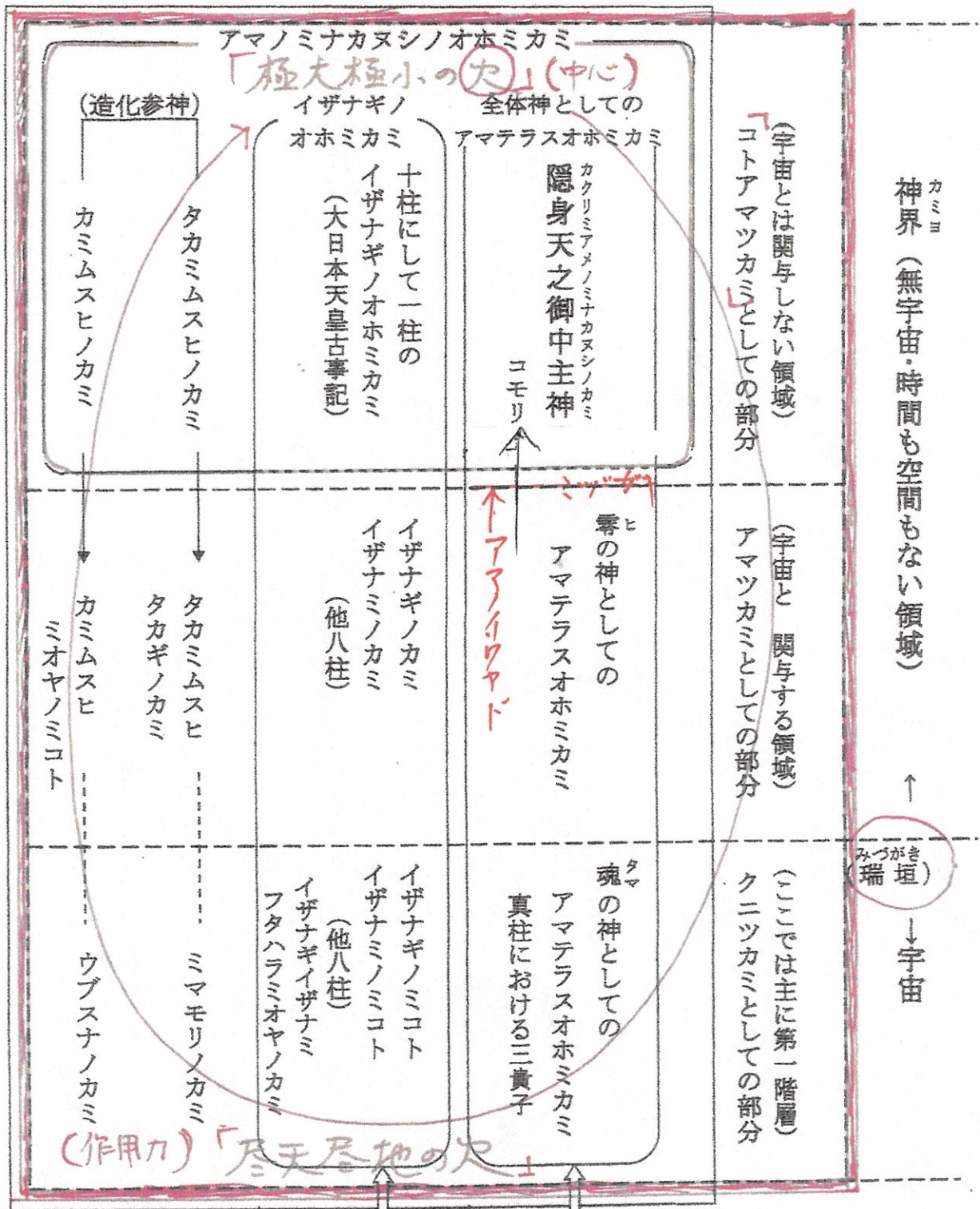


人間世界の祭祀は、御魂を齋ることからはじまる。その御魂齋と言ふのは、死者を高天原に歸らしめ、乃宗乃祖ニノサネニノソノの御魂ミタマと共に、神界樂土を築かしむる神事なので、日神事と書き、ミソギと教へたのが神代の神の御垂示である。それが、古典の上では、伊邪那美命の神避りますに由り、その御魂を齋いたのは、零ヒの神としての傳へであり、天若比古の死を葬オクられたのは、魂タマの神としての傳へであつて、共に人顯ウツソミ身魂ミの分際ではない。けれども、人間身を調伏し濟度し救出し誘導して神國を築かしむるのも、此の御垂神習ひ習ふものであるから、其の行事は、高木神の天返矢アマノカヘシヤの神事から出發して、八種ヤクサノイカヅチ雷の祕事に入るの櫛クシの雄柱ミタマクスシキカミノカミワザトシテノヒノカミワザ一つ火の火神事に神習ひ習ふのである。

人間身としては、本より極祕の零位を明にする事は不可能であるが、此の神の教へのままに之に習ひつつあれ、誰導くとはあらずとも、此の祕事を現じ得るので、齋るべき死者の境涯を明にして、之を教へ之を導き之して高天原に入ることを得せしむるのである。

それを、詞として稱ふるのは「ミタママツリノリト」で、古傳は頗多い。前に繰返して記した「燃ゆる火、取りてつつみて、福路フクロには、入ると言はずや、智くともなきに」とあるも、その一つであるが、之は、本來十二音一首の歌の前半なので、珍らしき詩形として傳へ來つた一種の長歌である。その後半は、キダヤamani、タナビククモノ、アラクモノ、ホシハサカレリ。ツキモサカリテ。

あるので、日神事を詠みたる神言ノリトで、神界築成の祕を教へて居る。此の神言靈を稱ふれば、之に導かれつつ神に入るの、日本民族が「コトタマノサチ」と傳へて來たのは、此のやうな意味で、神の詞が神の國を築きつあることを讚美したので、コトタマとは、「カミ」なる詞で、詞として拜みまつる「カミ」との義である。



造物主としての  
 境地による神名  
 (国生み神話)

宇宙を主宰統治する  
 境地による神名

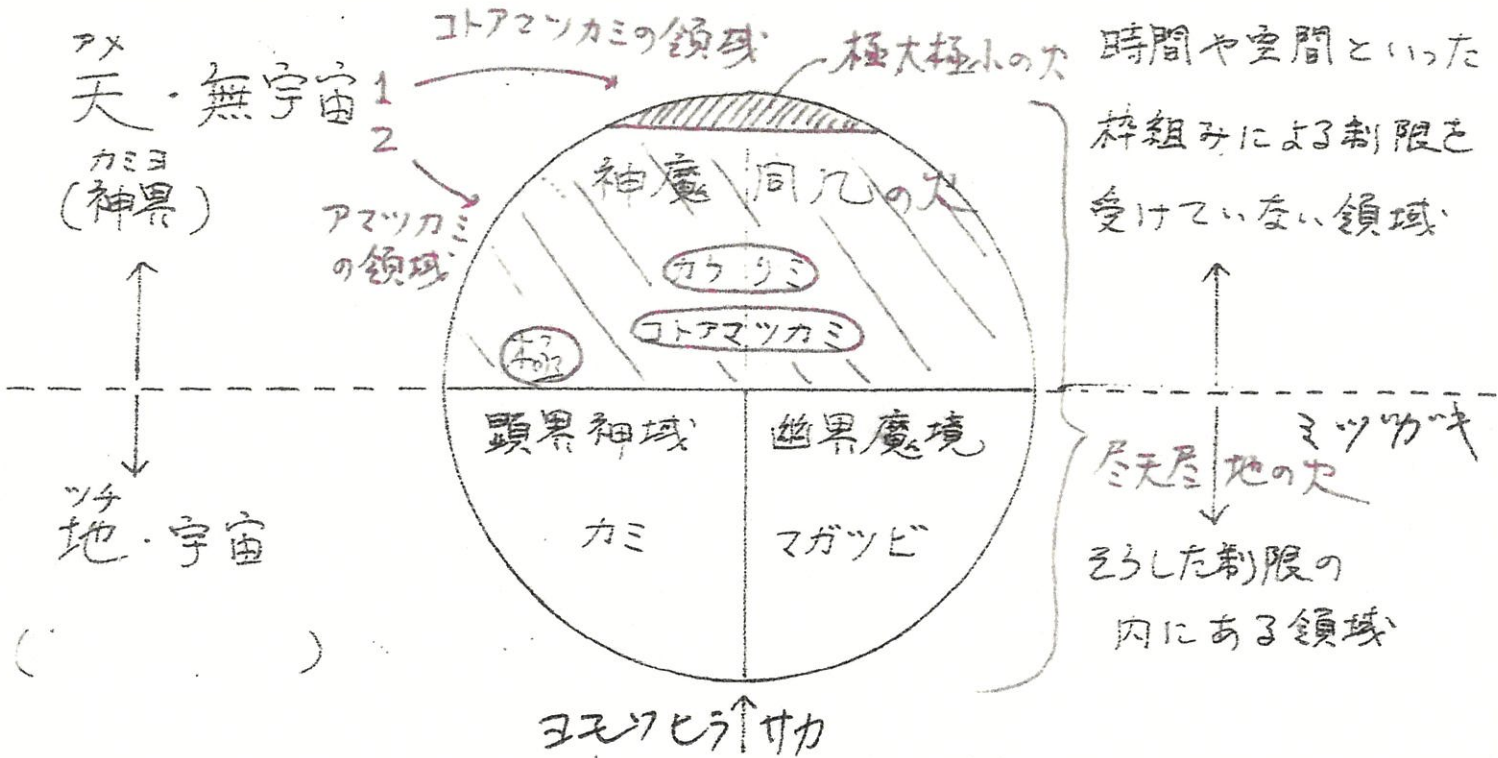
←左記はいずれも  
 境地の違いであり  
 実体として相異な  
 っている訳ではない



ムナケ

# 天地概略図

アメとツチを合わせて、大宇宙と称する。

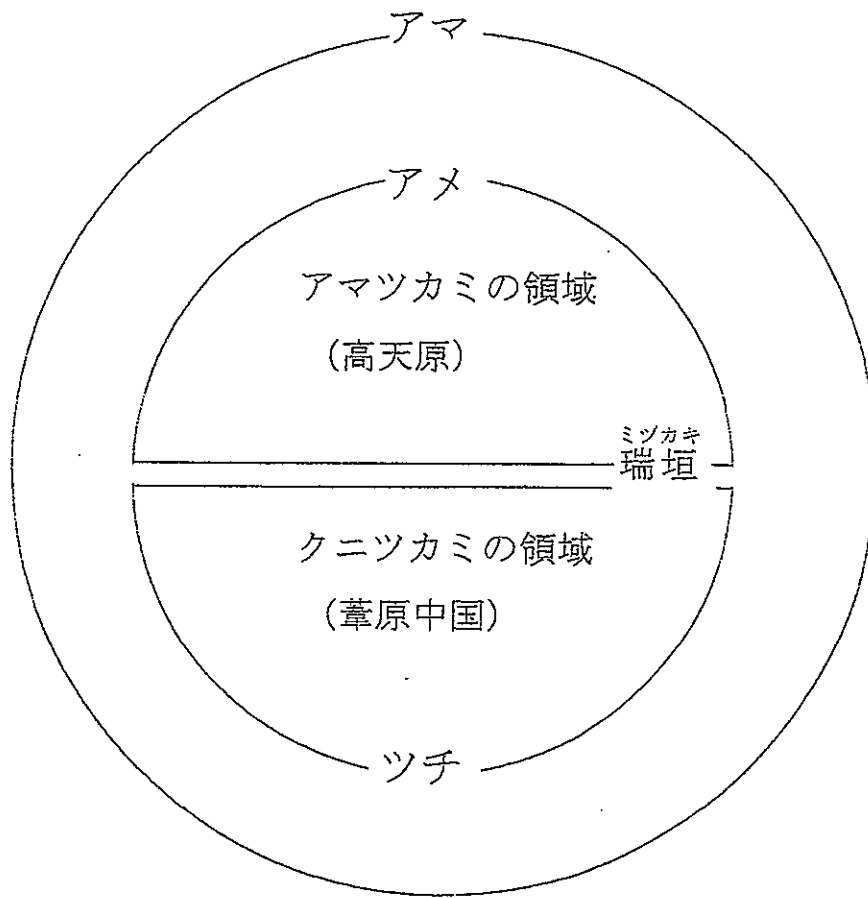


この二項対立の図式は、<sup>ツチ</sup>地の側でのみ有効。  
<sup>アメ</sup>天の側には及ばない。

<sup>アメ</sup>天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、  
 という時の「ア」の領域。  
 " 物理学的に言えば、宇宙創世以前の領域、

アマツテ  
 天地概略図 第二版 (あくまでも概略)

{	コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	アマノイハヤ (天石屋)	}	全部あわせて 「アマ」
	アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ		
	クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ		



- 「<sup>タカマノハラ</sup>高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。
  - 現実には、「クニツカミの領域」は、<sup>ナカツクニ</sup>顕界神域 (カミの領域、狭義の中津国) と<sup>ヨモツクニ</sup>幽界魔境 (マガツビの領域、黄泉国) とに分かれている。
- (第一版を参照)



三貴子 (ミハシラノウヅノミコ)

天祖・天照大御神  
(五男神ほか)

アマテラス

③ オホミカミ  
(女神)

(天孫降臨)

↓ 天津神の系列

↓ 伊勢神宮の内宮

② ウケヒ

(イザナギ・イザナミの「神生み」によって生まれた神々の代表)

↓ オホヤマツミノカミ

子  
コノハナサクヤヒメ  
(天皇命の祖神)  
スメラミコト ミオヤカミ  
オホクニヌシ ミオヤカミ  
(大國主の祖神)  
コノハナケルヒメ

(辛.34頁)

孫  
ニニギノミコト

子  
ホヲリノミコト  
(山幸彦)

国譲り

① タワハヤ

スサノヲノミコト (男神)

子  
ヤシマジヌミノカミ

五代の孫  
↓ オホクニヌシノカミ

③

ツキヨミノミコト (男神)

(三女神ほか) ↓ 国津神の系列

③ の一対

↓ 出雲大社

註) 天津神と国津神との区別について。

多田流では、

天津神とは、無宇宙の側に属する諸カ・諸実体。

「<sup>ト</sup>〇が<sup>ト</sup>〇のままに<sup>ムスビ</sup>産<sup>ムスビ</sup>霊<sup>カミ</sup>産<sup>カミ</sup>魂<sup>カミ</sup>たる神」のこと。

国津神とは、宇宙の側に属する諸カ・諸実体。

もはや<sup>ヒ</sup>〇ではない<sup>ミ</sup>〇を築いた神のこと。

(言霊の幸、196-197頁ほかを参照)

神話や祝詞では、

天津神とは、<sup>たかまのほら</sup>高天原(天の神界)に坐す神々のこと。

国津神とは、<sup>いづものくに</sup>出雲国など、地上の神界に坐す神々のこと。

(古事記や延喜式祝詞を参照)



昭和十九年六月二十五日 滿洲國奉天省熊岳城禊所に在りて此の解説を了る。

豫母都志許賣の神事成り成る時、天窟戸は開け關けて、八百萬神は、相互に手を拍ち、慶祝して云はく、

「あはれ・あなおもしろ・あなたのし・あなさやけ・おけ」

と。

日本古典多しと雖、古語拾遺ひとり此の祕言を傳へたのみである。

太玉フトタマの太幣帛フトミテクラを捧げまつりて、天宇受賣アメノウスメの祕神挂ヒメカミカカリと成り、八百萬神ヨロツノカミは、日神ヒノカミの御田ミタの身魂ミタマであることを實證サトリ得るのである。

あなうれし・みたのみひかり・さしとほり・あめのうずめが・むなちもも・ちよろづみたま・なりなり  
て・ひふみよいむと・うけふねを・ふみとどろこし・あめつちに・きゆらかすやぞ・あめつちに・さから  
かすやぞ・あちめ・あちめ・いうをえやあと・うけふみたりや・あちめ・あちめ・ああひ・ああが・ああ  
ひがてんじん・ああひがてんじんゆうあいこう。

よしありと、ひとこそみらめ、みづうみの、ゆふべをぐらく、ふえのひびくを。

以上

言靈の幸

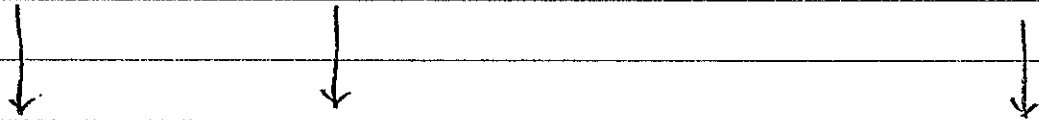
第二篇 豫母都志許賣 完

無宇宙の神 (元型)  $\xrightarrow{\text{カムハラ神習子}}$  宇宙の人 (実際)

神 天照大御神 根本魂直日  
 国 (アマノハヤにこもっており、  
 の 高天原葦原中国ことごとくに暗し)  
 の 築成

アマノウズメの舞い踊り

神国の築成に努めるコトヲマ



神 アマノハヤが開けて  
 国 世界が明るくなる。  
 の  
 完 成 あはれ、あなまもこへ

ナホヒの統率力が発輝せしめ  
 全身にゆきわたる。

神国の完成を喜ぶコトヲマ



( 外 郭 ) ヤホヨロツカミ  
 八百萬神  
 ( 日神の身魂 )  
 ヒカミ ミマテ

マガツビムシ  
 肉伴身など  
 ( → 神となりたるマガツビ )

あなさをけ  
おけ。

アハレアナオモシロアナタノ  
シアナサヤケオケ。

二十一音一語にして一言なる  
天照大御神天照皇大御神天照坐  
皇大御神の神言なり。

アハレアナオモシロアナタノ  
シアナサヤケオケ。

之れを五言なりと傳へたる齋  
部廣成、大同二年二月十三日、  
古語拾遺として綴れるもの、遂  
に後人を誤らしめたるは惜むべ  
きかぎりなり。

アハレアナオモシロアナタノ  
シアナサヤケオケ。

二十一音一語の神言靈なるこ  
とは、

アマテラスオホミカミアマテ  
ラススオホミカミアマテラス  
マシマススオホミカミ。

三十八音一語の神言靈なるが  
如くなれども、其のアマテラス  
オホミカミと称へ、アマテラス  
スオホミカミとも、アマテラ  
シマススオホミカミとも称へ  
まつる神言靈が各別の神言靈な

るが如く、アハレなる神言靈も  
アナオモシロと云ひ、アナタノ  
シとも、アナサヤケオケとも云  
へる各別の神言靈も皆、各別に  
別義の神言靈なるなり。

(中略)

アハレアナオモシロアナタノ  
シアナサヤケオケと称ふるは、  
アアヒガテンジンユウアイコウ  
と称するに似て甚異るところあ  
り。

天照坐皇大御神天照皇大御神

天照大御神と称へまつるがアア  
ヒガテンジンユウアイコウと同  
義にして、アハレアナオモシロ

アナタノシアナサヤケオケと称  
へまつるは天照大御神天照皇大  
御神天照坐皇大御神と称へまつ  
ると同義なれば、此の神言靈は  
天照大御神出生の暁、諸神が讀  
へ仰しまつれるなりと傳へたる  
なり。

祓禊の暁にして神人の神言靈  
なり。

オホヒシルメムチノミコトの  
神言靈なるなり。

アスパカスヤゾサカラカスヤ  
ゾオオオオオオオオと称へまつ  
ると同義なり矣。

以上

昭和十一年八月二十五日

神界の築成につとめる言靈

他、「ヒフミヨイムナヤココノタリヤ  
モモチミテリ」など

神界の完成を喜ぶ言靈

(三つの神名を逆の順で唱えると、  
別の意味(右記)になってしまう  
ので、注意を要する。)



# 基本図D. 無宇宙の内部構造

( 教本 2-1-4. 秘稿『日本天皇国』の解説. より )

この図、全体が無宇宙である。

( 図表 1: 高天原の中核部分 )

「三神即一身」の三神

ヒノカミノカミミヤ  
火神宮 (コトアマツカミの領域)  
(造化參神ほか)  
ヒノカミ  
火神、天照皇大御神

バウガウエン  
莫翼圓  
大宇宙の大中心  
極大極小

産出  
ヒノカミ カミヲ  
火神の神徳としての  
天照坐皇大御神  
(修理固成と見做せば二柱神)

アマツカミミヤ  
天津神宮 (アマツカミの領域)  
(ヒノカミとしての三貴子)  
ヒノカミ  
日神、天照大御神

バウガウエンリン  
莫翼圓隣  
宇宙の中心  
最大最小

あると古典は伝へてある。

そのやうにして古伝を探究すれば幾多の典拠を得られるが、何れも共に大宇宙の大中心なりとの義で、「ヒノカミ」としても「タマノカミ」としても「ミノカミ」としても「ミタマノカミ」「ヒトノカミ」としても、一貫したる中心で、それは、単に、そのものの中心と云ふのとは別なので、人間的に見てとか五官的に見てとか云ふ範囲での中心ではなく、それを超えての大中心なのである。

それで、此の大中心は、唯一無二の「極」なる「零」である。

従つて、日少宮と仰ぎても日隅宮と称へても、等しく共に別天神コトアマツカミの火海ヒノウミで、大平等海で、綿津見の鎮守ミマモる海で、白玉光である。その白玉光底に潺湲たる泉は、天真名井の「ミモヒ」と称へて稜威三柱神タマノミハシラノカミにてまします。

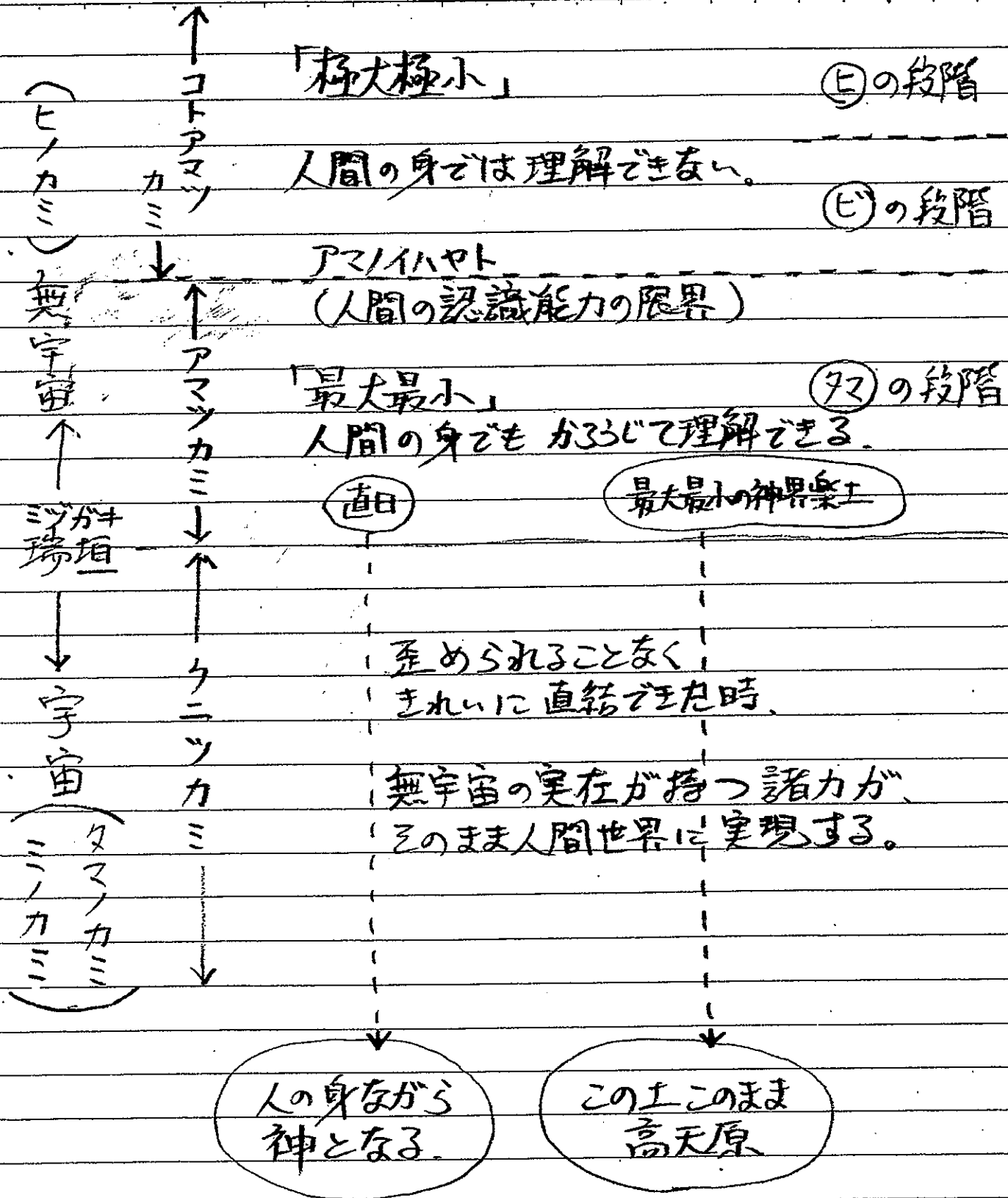
「タマノミハシラノカミ」をば、数理観にて「零なる一」と解き、言靈観にては「ヒフミ」と称へ、神象観にては「アメユヅルヒ・クニユヅルヒ」と画く。その図を書かねばならぬが、転写誤伝が有ると良くないから他に別に伝へよう。兎に角、そのやうに、此の三つの「たより」に依つて、人人は各自各自に自己の躰得を古典に照らし合せ正しき神の伝へを確認すべきである。

日本神道の正伝を得た人の身には、必、其の証左シムルシが存る。

日本古典の中では、「天地と別けこし時ゆ、久方の天津験と定めてし、天河原に、璞の月を累ねて、妹にあふ時をし待つと、立待つに、吾が衣手に、秋風の吹きかへらへば、立ちて坐て、たどきも知らに、村肝の心おぼえず」とあるのがその最簡明なるものである。そのことを、

「アマノカハラ  
アマツシルシ」

「天河原とは天津験と断れる如く神人たる証左として人身に授与したる異靈クシビなり。統一魂としての奇身魂なり。」





物には無いとか有機躰と無機躰とでは異るとか峻別し主観の有る者と無い者と區別して取扱はうとするかも知れぬ。けれどもそれは自己の省察が足らず他を觀察する途を忘れて居る為である。

古典を解くには、

第一に、大宇宙の唯一であることを知らねばならぬ。

第二は、唯一つである大宇宙はそのまま万有であることを知らねばならぬ。

第三には、唯一つであり万有であるものは唯一筋の真理で貫かれて居ることを知らねばならぬ。

第四には、以上の故に一塊の土にも一滴の水にも一抹の雲にも一陣の風にも一閃の光にも一管の音にも一葉の草にも一点の塵にも大宇宙の事理は具はつて居ることが判らねばならぬ。

第五には、事実で真理である唯一の道とは極大で極小で大平等であることを知らねばならぬ。

第六には、大平等であるのに其の万有がその中に在つて相互の対立を認めるのは個個の結晶が異なる為であることを知らねばならぬ。

第七には、万有はその結晶が異なる為に牆壁を高くし境界を固くして居るがそれを取り除きさへすれば一円光明の身と成るべき理を知らねばならぬ。

第八には、牆壁境界を撤したる人の身は人の身ながら「カミ」と称すべきことを知らねばならぬ。

第九には、人の身としての神は神代の神と不二であることを悟らねばならぬ。

第十、唯一つなる大宇宙とは零なる一であるから万有はそれを種子とするのである。

第十一、宇宙万有は総べて主観すると共に他を客観し他より客観せらるると共に自らは主観して居るので主観

中に客観が有り客観中に主観が有る。相互に観門を開いては相互観をする。裏からも観れば表からも観る。総合しても観れば分解しても観る。自他を総べても観れば箇箇分分を箇箇分分のままに表裏主客観をもする。その観門は多角多面重重又重重百八観千八百八万八億無数観が行はれる。そこで唯一つの大宇宙ではあるが、

「客観しては高天原で○<sup>ヒ</sup>であり」

「主客合観しては神漏岐神漏美二柱皇親命にてまします。」

「主観しては神で○<sup>ヒカリ</sup>であり」

「高天原<sup>爾</sup>神留坐」とあるが

対立的境涯に出頭没頭しつつある人類を対象として分り易からしむる為に「神留坐」と書かれたのである。

「カムツマリマス」とか「カムツマリイマシマス」とか読むので其の「ツマリ」とは充塞の義で「タカマノハラ」それ自躰が然うだと云ふに等しい。それで客観しては「タカマノハラ」であるが主観しては「カミ」でその「カミ」は一神で万神である。

人はそれを人としての機能相応に拝むより外は無いから種種様様の名称で讃めたり貶したり勝手なことをして居る。従つて自分等人類の祖先を「カミ」と拝むものと乃至「微生物」だと論断するものと実に多種多様である。

此の祝詞には唯一の高天原が「カムロギ・カムロミ」二柱の皇親であることを伝へて居る。

「皇親神漏岐神漏美乃命以<sup>ヒ</sup>」とある神漏岐神漏美二柱皇親命を古事記には伊邪那岐命伊邪那美命二柱神とも高御産巢日神神産巢日神二柱御祖命とも伝へられてある。まるで別なやうな御名を同じ神の亦の御名だと申しますのは此の神が共に等しく宇宙万有産出の祖神にてましますが故である。その御名の異なるのは之を拝む人の異なるが故であり或は時を異にするが故であり亦は処を異にするが為である。それは単に日本古典の上のみではなく各



国各地の古典に通じて認めらるるところである。

宇宙万有産出の祖神は對待を絶して居ること固よりであるから時間に拘はらず空間に限られざる唯一超絶の神にてましますのである。それで古事記は「隱身」とか「独神」とか「別天神」とか記し、極大で極小で極で無極で「零」であることを明にしてある。零とは大平等であるが人は其の中に自己なる一点を認めて其処に「カミ」を拝む。故に此の神は既に零ではない。隱身でも独神でも別天神でもない。相對の妙用妙象を現はされたのである。では是を御声として拝めば「カムロギ・カムロミ」であり御象として仰げば「伊邪那岐・伊邪那美」であり数として算めば「〇十」で $\oplus$ で十字架で十である。

此の「カミ」とは一であると共に二でまた三で五で十で百千万無量である。一としては天之御中主神で二としては高御産巢日神産巢日神で三としては天之御中主神高御産巢日神産巢日神で五としては天之御中主神高御産日神産巢日神宇麻志阿斯訶備比古遲神天之常立神で十としては宇比地邇神須比智邇神角杵神活杵神意富斗能地神大斗乃弁神淤母陀琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神で百千万無量としては百八百万天津神国津神と称へまつることを古事記は伝へてある。なほ日本書紀旧事本紀祝詞式等と対読すれば一層明瞭になるし他国他民族の伝へた古典をも併せて見るならば更に良いのであるが今は成るべく煩を避けて古事記だけに止めたい。

さてこの大宇宙たる高天原は超絶零界であるがその御活用を仰ぎまつれば神漏岐・神漏美として万有を発現するので之を皇親と讚へまつる。その皇親とは「ススムツ」であり「スメラガムツ」であり「スメラガムツミマスナル」であり「スメリオヤ」である。「スメリオヤ」としては皇祖である。けれども皇祖とは等しくして僅に異なる。「祖」とは「ミオヤ」であるが「親」は更にその御活用を示して相和ぎ相親しみ相睦み相誘ひ相合ひ相交はるの義

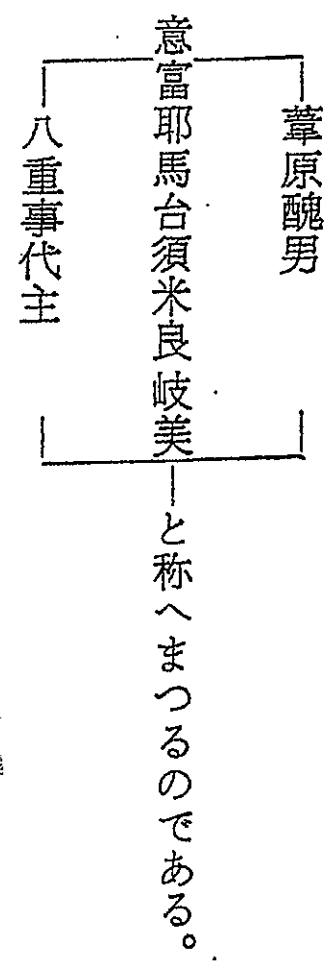
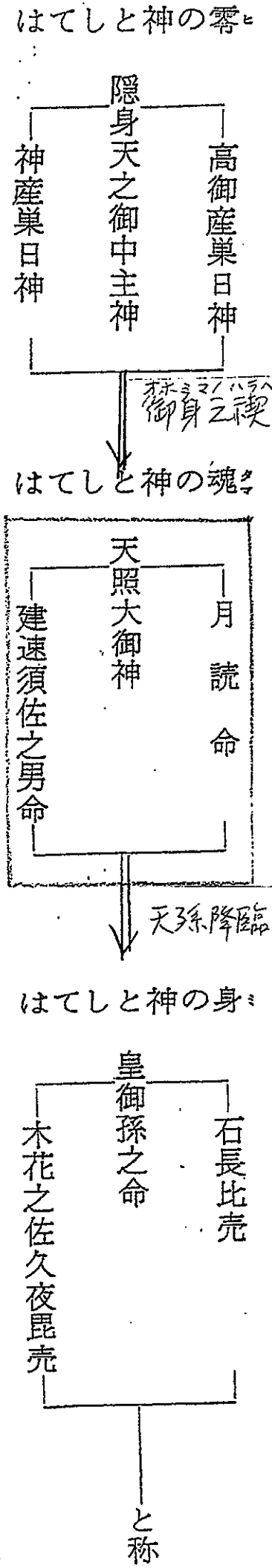


であるから「カムロギ」であり「カムロミ」であり「カムルミカムルギ」である。名詞 躰言でもあり活用語でもあり其の時と其の人と其の処と其の祭典の目的とに相応して変化するのである。

天之御中主神と称へまつるのみでは一切を包括し給ふ御名であるが其の御活用を仰げば高御産巢日神産巢日神にてましますからそれを祖神としては神漏岐神漏美とも伊邪那岐伊邪那美とも称へて皇祖で皇親で「皇親大倭須米良岐美」で「吾大伎美」で「伎美」にてましますのである。之を支那人は陰陽と呼びまた乾坤とも称へ近く身に取りては男女と云つて居る。日本人は敬虔の念から「加微」と称へ支那人は不可測だからとて「神」と呼び陰陽だと云つたままでの異別なので共に「祖」で「親」で「ミオヤ」で「オヤ」である。

その「ミオヤ」の「ミイノチ」の変幻出没が人であり物であるからとて「天命」とか「命」とか書き天神の詔命なればとて「ミコト」と称へ「ミコトノリ」と仰ぎ「オホセ」なりと畏みまつるのである。

此の御声として拝む神漏岐神漏美の妙用を高天原にては「男建」と呼び「雄誥」とも称へて大宇大宙の勅命則別天神の命で古事記に所云の「天神諸命」である。そこで神漏岐神漏美として男建び雄誥ぶ大宇宙の神勅のままに皇親の神には百八百万と在る限りの神を神ながらにお集め遊ばされてその神道を神の遮爾遮爾神顕し各自各自の神性を發揮させようとて神ながらにお議り遊ばされお諭し遊ばされお教へ遊ばされお導き遊ばされた。その結果として八百万神は皆悉宇宙の事理を明にしたのである。之を人間的に観て現今の詞で言ふならば「正しき与論」を作られたので茲に其の真理のままなる国を建てさせ給ふとて先其の中心の超絶性をお示し遊ばされたのである。則国家機構の中心は唯一超絶神にてましますし日本民族は之を皇御孫之命と讃へまつり仰ぎまつるのである。



ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御扱はしますますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ



ば零の内容が二であり三であり四五六七八九であり然うして一であり十であるが為に其の一二三四五六七八九の加減乗除が美とも醜とも善悪とも正邪曲直とも変化し治乱興廢ともなるのである。之を換言すれば善悪も美醜も正邪曲直等も「我」の外なるものではないのである。此の「我」を古聖は「如来」と呼ばれた。そこで

「如此依志奉志国中爾荒振神等乎婆神問志問志賜神掃掃賜比語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止天磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別天降依志奉伎。」

と、高天原なる皇親の命には人の国を神の国と築き成されて建国の天道をお示し遊ばされたのである。此処で注意すべきことは「天磐座・天降」の文である。「天磐座」は○界であるから説明語の用ゐやうが無い。けれども

此処に用ゐた文字に従つて堅固の意とするならば堅固になること此の上も無い。が此の「磐」は「イハサカ」の「イハ」と等しく正しく登き升る義を表したのである。それ故に人間から仰げば「天降る」であらうが「高御座」たる「天磐座」の御光は十方に等しく登くので「正しく升る」ので方位に拘はるのではない。十表に雄走る稜カミノミツ威である。神代に於ては之を「稜威雄走神」と称へまつる。その雄走が登き登くのであるから茲に「天磐座放」とある。「放」は「從」の誤りである。若しも「放」とするならば下降転落で不祥の語となる。天之磐座を放れずして天降りましますが故に神位なのである。此の神位を高御座として国土を經綸し給ふが故に重重無尽の円光として万世一系にましますのである。

既に述べたる如く中心は唯一超絶の零神ヒノカミでそれが高天原にては皇親神漏岐神漏美命と仰ぎまつられ神国淨地を築きては皇御孫之命と讚へまつらるのである。然うして皇親の神には建国の大本をお示し遊ばさると与に悪神邪鬼をば教へ諭して其禍マガを掃ひ清め草木の一葉までも乱れ擾ぐこと勿らしめてさて高天原なる神座より神代の

の勅命のままに猛然躊躇してお降り遊ばされたのである。

往くか返るか来るか去るか。窮め来れば唯是一点である。之を古老は「高天原」だと教へさせられた。斯くして此処に此のまま高天原は成り成る。

「如此久依左志奉志四方之國中斗大倭日高見之國乎安國止定奉下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知御孫之命乃美頭乃御舍仕奉天之御蔭日之御蔭止隱坐安國止平氣久所知食。」

之を第三段とする。第一段では中心としての皇御孫之命とその外廓たる八百万神との關係を教へて先其の中心の確立と外廓の統一とを命ぜられ第二段では外廓の分裂と統一と其の結果とを明にせられ「天之磐座」のそのまゝなる神國淨地を人間世界に築き成したる曉を第三段に詳述せられたのである。十方板の「」

その神國淨地は「大倭日高見之國」と呼ばれるので「四方之國」を外廓として緯ヌキの在るかぎりと「下津磐根」「高天原」と下の下まで上の上まで経タテとしての在るかぎりとを「美頭乃御舍」即「天之御蔭日之御蔭」としてその中心に隠りニヒ「隱身カクリミ天之御中主神」のそのままに上天下地四維八隅一切合切を安らげく平けく統治統率せさせ給ふ。

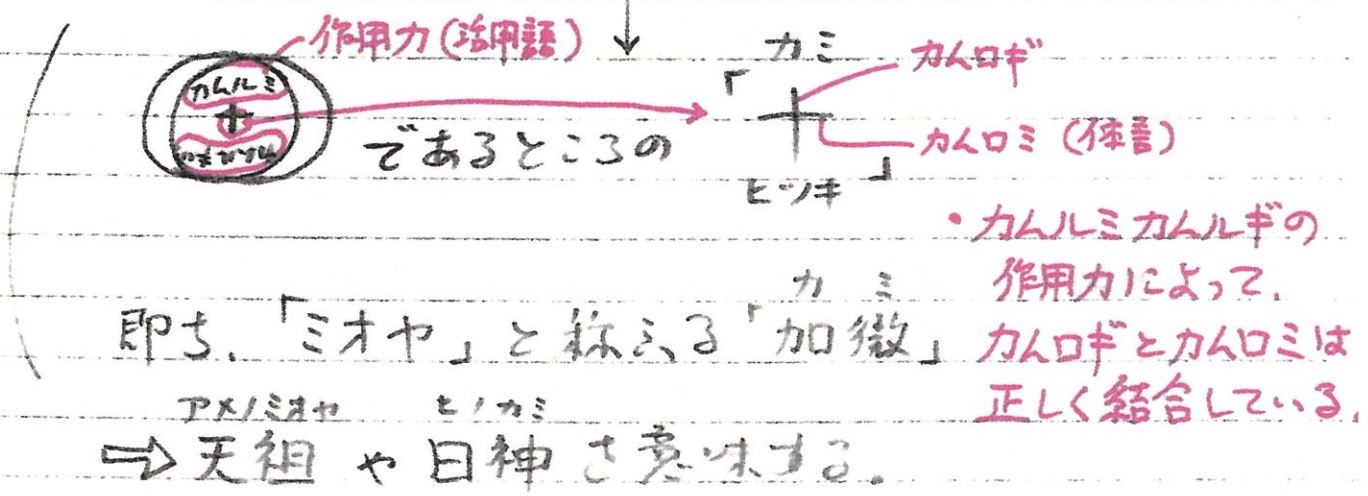
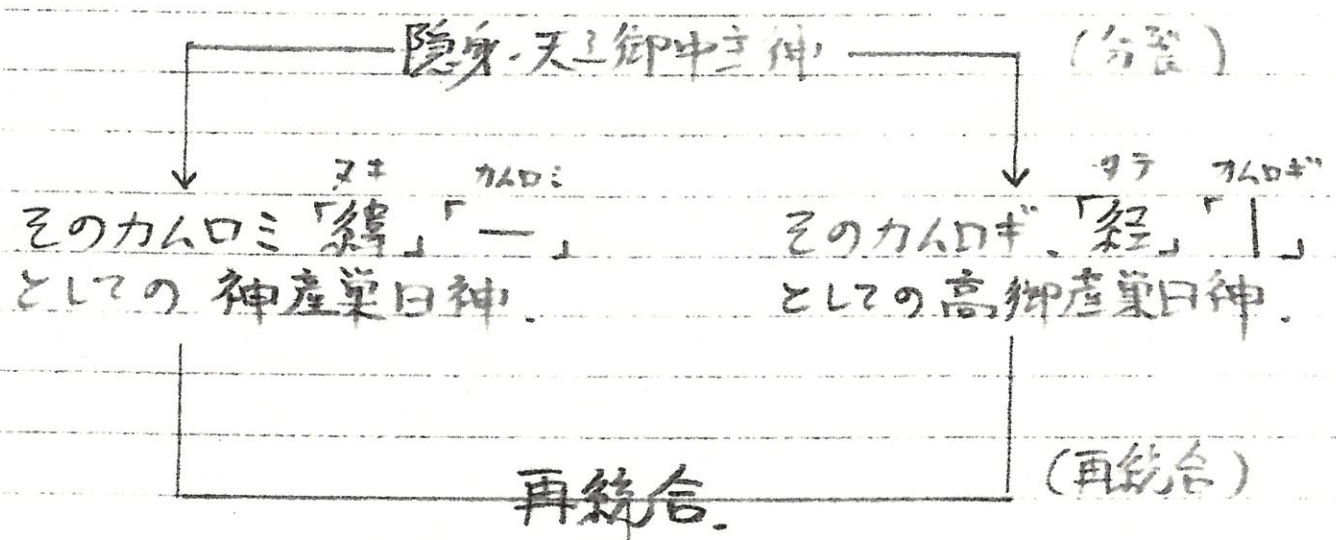
それは人間身として持しまつることを得る御玉躰が高天原にての皇親神漏岐神漏美命にたまひし隱身の神としての天之御中主神にたまひますが故に近く凶解を借りて説明すれば○なる球躰で⊕である。之を古聖は十字架と教へられた。「十字架上一點之火」は時空を超えて時空を現はしつつ過去も如是将来も如是現在も如是経に緯に際涯無き日なる光である。之を「日神」とも「⊕」とも「・—○」とも稱へて来たのは人間身の機能相應に判り易からしめた神の御意である。

日神ヒノカミによつて完成された宇宙全体を表現する時空・—○と描く。(262)



# 未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明

未来230. 『<sup>カミ</sup> <sup>むす</sup> <sup>むす</sup> <sup>むす</sup> <sup>ヒノカミ</sup>  
その「十」と箱で結ぶ(元としての)隠身』




典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神

→ 基本的には、『こうした「二つのもの」への分裂とその再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ → タカノカミ → ミノカミと「組み直されて」ゆくのである。

とか天国とか呼ぶに等しく、主観しては、「天忍穂耳命」と称へまつる。亦名は、「稜威三柱神」にてまします。

其のやうに、「高天原爾」「神留坐」「皇親」「神漏岐・神漏美乃命以豆」「八百万神等乎」とあるのを言ひ換へると、「スメラガムツミマスナル」「ミオヤノカミ」「オヤ」と称ふる「加徴」は、即、「陰

陽」で、「天地」で、「経緯」で、「

「隱身」。その「隱身」の「カムロギ・カムロミ」としての「ヒメコトタマ」を仰ぎ、「ヒメコトタマ」のまにま

に、「八百万神等」を「カミナガラ、カミノマニマニ、集へ給ふ」のである。それ故に、

「神集集賜比」「神議議賜比」は、「カムツドヘツドヘタマヒ」と読み、「カムハカリハカリタマヒテ」と読む。

此の「カムハカリハカリタマフ」は疑義を相談するのではない。中心たり根本たる「神」には固より疑義は無いのである。けれども、外廓たり枝葉たる八百万神は之を知らぬから、忘れて居るから、中心より外廓に向つて、根幹より枝葉に対して、疑ひ無からしむべく八百万神の議を開陳せしむるものである。之を、人間的に云へば、直く正しく明く美しく誠に善き与論を作るのである。さうして、「神命」を明にし、その神命に応へまつる。之が、「カムロギ・カムロミ」なる「天神諸命」の「カミナガラ、神ノ国ヲ築キ成ス憲法」である所以である。

此の「神國ノ憲法」は、

「我皇御孫之命波」「豊葦原乃水穗之國乎」「安国斗平久知所食斗」拝承しまつるのである。

「アガスメミマノミコト」の解説として

「アガ」の「ア」は親しみ睦む意。「吾」であり、「畔」である。その「ア」の凝りて赫灼と照り耀ける身なりとの意にて「アガ」と云ふ。

人皆は名を異にして我在りと相互にぞ知る。神の宇氣比呂。

で、人が五官的に表から見れば、名を異にして相互の存在を認めて居るが、五官を捨てて裏から見れば、一円平等の「 $\odot$ 」である。その「ア」としての中心と仰ぎまつるなる「我皇御孫之命」は、「豊葦原・水穂之國」と呼ばるる人類世界を「カムロギ・カムロミ」と親しみ睦み和ぎながら強く堅く制御統一して逸脱せしむることなく、平和に安楽に喜び満ちたる生を、天地と共に享けよ、享けさせよ。「聞コシ食セ」。「嚙ミ嚙ミ組ミ組ミ」「組織し制御し主宰し統一して円満具足の」「統一魂神」たる実を明にせよ。と、

「コトヨサシマツリキ 事依志奉伎」  
「コトヨサシタマヒキ 事依志奉伎」

「コト」は事であり言であり命せごとで、さうして、「宇宙の大道」で、単なる命令とか希望を述べるとか依託するとか云ふのではない。勿論、強制するのでも要求するのでもない。ましてや、予言などとはまるで縁の無いことである。「是クアルベクシテ是クアル神ノ道」である。と言ふのは、「宇宙」即「箇躰」即「統一躰」。本来の筋道が然うなので、その筋道のままに、人の世人の國は成立し統治せらるべきものである。と命せられたので、治国の原理は、修身、齊家と等しく $\odot$ であると教へられて、「中心ノ麻邇麻邇、外廓ノ機能ヲ發揮スル」のである。

中心は、「超絶ノ実在」として全躰を主宰し統率して居るのだから、その外廓を觀れば、そこにそのまま、中心の「神性」をうかがひまつらるるのである。彼の相者が、一指頭を見ただけで、その全身心の正邪曲直善悪美

# 人は一人の人にあらず

## 多田山公秘稿

人の身は何れより来たり何れにか往く。

人は時に自己の生死起伏を思ひ見ざるべからず。

往く人の皆清かれと知るかぎり皆明かれと来る人の皆清かれと知るかぎり皆明かれと神ながら神の宇氣比て神の宇氣毘て神の教へて神輪赫灼く神の國ぞも神ながらなる。

自己の生死起伏を知らんと欲せば、神の宇氣比に依らざるべからず。

神の宇氣比は人の身としては知り難きところなれども、神人（かみのひと）は之れを信じて神業（かみのかみわざ）を建設す。

神人の神業を信ずる人には、神と人との宇氣毘の行はるるものなり。

人の身にて神を知ることば、神人の神業を翼賛する時なれば其とは知らずして自（おのづから）、知り得たりとも称すべきなり。

ひふみよとひとこそまなべいむなやはここのたりてぞよはのまじはり。

神の言（ことば）は神ならでは知り難きところなれども、神人は之れを信じて神事（かみわざ）を行ずるなり。

神人の神事を信ずるものには神の教への行はるるものなれば神と神人（かみのひと）と人との三位一體たる事實の顯現（あら）はるるなり。

ひとことのかつらぎぬしやかみまもるもりのさかきばとこよとこよも。

人間身として發音し得る神の言（ことば）は神人ならでは知ること能はざるなれども、之れを信ずる人は夢になりとも教へらるることの有るものなり。

言（ことば）にも相（すがた）にても夢になりとも知りたしと思はば「ヒクマノノシホクムヲミナトコヨニモキミキサメトヒクマノノ」と唱へつつ念じつつ正位に臥床すべし。

正位に臥床すとは安靜にして正念三昧なるを指すなり。

ふるのみややすのかはらにひとぞよるけふをばやかとかみのうけひてかみのうけびてかみのをしへてかみのしらしめてかみのかみわぞてりにてりたるかみのまにまにかみながらなる。

人の身は何れより来り何れにか往く。

いつかまたやしまのはにはあ



ひあはんよのあらしひをとくよしもがな。

生死も本来は生死として執すべきもののあるにはあらず。

起伏盈虚も必竟するに一圓光裡の波紋にすぎず。

きたやまにたなびくくものあをくものほしはさかれりつきもさかりて。

日月山河とても、人間身生滅の事理と異なることはあらざるなり。

海は逃げ山は躍ると古の書にぞ書ける日の神の神事成りてわれ立てる時。

人は一人の人にあらず。

萬類萬物は皆共に明開有ればとて日止(ひと)とは名づけたるなり。

日止(ひと)は火聚なればとて火人(ひと)とは名づけたる

なり。

火人は女體の産出しつつ相續するものなればとて人(ひと)とは名づけたるなり。

もゆるひもとりてつつみてふくろにはいるといはずやさともなきに。

一二三四五六七八九十。

○◎◇◆靈念思考。

在るかぎりを人(ひと)なりと教へ、日止(ひと)なりと知らし、火人(ひと)なりと傳へられたるは鹽土翁(しほつちのおぢ)の神慮(みこころ)畏きところなり。

しほつちのおぢがたまひしかたまもよあめつちいまぞみすまりにたる。

火の結びたるを火人なり日止なり人なりと教へ給ふと共に、其の結晶堅固に統一したるを加美(かみ)なりと教へられたる

は神吾田鹿葦津比賣(かみあがたかあしつひめ)の神挂なり。

このはなのさきのさかりをあまをとめよにさちあれとあさつとめする。

以つて死者を齋り生者を壽ぎ病者を癒し愚者を訓へ賢者を讃へつつ人の世を神の國と成し神代とは成すべきなり。

以上

昭昭琅琅一圓一音如如来。  
阿知米阿知米。

大正の人道とは正誠正義にして神國を築成するの謂なり。

# 神命(一)

多田雄二

神に参(まゐ)ることは神となるなり。

神となりたる人は極大極小(はてなくかぎりなき)なり。

極大極小(はてなくかぎりなし)とは計算無き(はかることあたはざる)なり。

生死無き(いきしににとらはれざる)を神人(かみのひと)とは称へまつるなり。

神人となるべく神言(かみのことば)を称へまつれよと、神の教へたまへるなれば「アアヒガテンジンユウアイコウ」とは唱ふるなり。

誰が手振見習ふとしもあらなくに日毎をかしき幼児のわざ。

此の歌は日神の教へたまへる神言靈なり。

日神の教へたまへる御言靈(みことば)

みことば(は其のまま日神にてましますなれば、其のみことばを唱ふる時は我も其のまま日神の眷属(みうち)とは化するなりと知るべきなり。

其のみことばとは「アチメ」

「アアヒガテンジンユウアイコウ」「ハルヒヒメハルヒヒメハルヒヒメ」等と次々にみ教(をしへ)を仰ぎまつるべし。

かかる神のことばにをしへられてかみとなるをかみわざとなふるなり。

かみわざをならひかみわざをあらはしつつかればかみのひとにしてかみのくにをきづきつあるなり。

自(みづから)神となり又他をも神となすには神言(かみのことば)を称(ただ)ふると共に神饌(かみのみのり)を模(うつ)しまつるなり。

神言を称ふることは更に音楽となり、神饌を模すことは更に舞曲(まひ)となる。

音楽(うた)と舞曲(まひ)と更に物を供へ神檀(かみだな)を造る作法あり。

之れにて拜神の三大儀礼(みことば)

つのみ(のり)を完ふすべき(つくすものとなる)なり。

拜神の三大儀礼(かみをまつること)は身を修め、家を齋へる根本行事(もととなるもの)なり。

神の音楽とは昔より神楽歌(かぐらうた)と称へて数多く世に伝はれるところなれども人の詞(ひとびとのつね)にもちめることば(とは異なるなり)。

神楽歌は神の教へたまふ詞なれば神言靈(かみのことば)のみなるも人の詞を交へたるもあるなり。

ひくしほの

しほのまにまに

ひくからに

またみちみちて

つきまどかなり。

此のかぐらうたは神のことばのみなれども、そのかみのことばが人のことばとしてもちひられつつあることばもまじりたるなり。

神楽歌をならひおほへ神の舞曲(まひ)をなしつつかれば神の国にして神の人とはなるべき

なり。

神の国は清く正しく美しくして善き人のみの団欒(まどあ)せるなり。

ひとふたみつよついつむつななやはこのへのきみ。

之れを常世の神言(とこよのかみことば)と白しまつりて少名彦神(すくなひこのかみ)の教へたまふところなり。

このはなのさきのさかりをあまつひのひかりてらせはとこよとはしる。

之れは「阿知米(あちめ)」の祕言靈(ひめことたま)と白しまつりて常世の長鳴鶏(ながなきどり)の神伝(かみのつたへ)とは称ふるなり。

以上 昭和十二年三月五日

とぶとりのあすかのみやはか  
みながらかみのとこみやかみし  
らすなり。

人の心いくへに重ねいくへに  
か~~た~~だてやすらんここにかしこ  
に。

之れを日神の神言靈となす。

□にして日にして二にして一  
にして一にあらず二にあらずし  
て◎にして◎にして人なり。

人とは十にして田にして◇に  
して□にして◎にしてヒフミヨ  
イムナヤコトにして十種にして  
一種にしてヒトなり。

之れを八とも八とも久とも描

きたるは支那民族の伝承したる  
ところにして四象にして両儀に  
して大極にして小極にして易に  
して日月にして柩にして墓にし  
て佛にして弗にして非にして杏  
にして靈にして雨~~雨~~巫にして慈  
雨にして零にして○にして無に  
して無にあらずして有にして有  
にあらずして人にして人にあら  
ずして印度人はアミダブーと傳  
へ来れるなり。

日神の神言靈を称へつつあれ  
ば人の身ながら神の身となるべ  
きなり。

其の故は神の言靈が人の身を  
導きて神界を築かしむるが為に  
して人としての神と成らしむる  
なり。

其の安楽世界と云ふのは弥陀浄土であるところの佛国で基督の天国であるところの樂園である。

日本民族は高天原と称へまつるので、天照坐皇大御神の築きたまひて天照大御神の知ろしめしみます天照皇大御神の神界である。五代にして七代にして三十五代にして一代であるところの三十六神界である。

つまり善悪を明瞭に判別の付いた世界である。之れを天地初発と教へ来りしところで善は善であり、悪は悪で、美は美で、醜は醜で、正は正、邪は邪であると各人各自が知り得て行ひ得たる曉なので、一圓昭昭一音琅琅の極無極限無限の日にして、火にして一にして非にして否にして緋にして光明晃耀赫灼赫赫たる大宇大宙なのである。大宇宙の大中心としての無宇宙にして無宇宙の無中心である。

無宇宙の無中心であるから極大であつて極小であつて極大極小である。一圓相で一音響だとは示の教へたまふところで人の身としては知り得るところではない。

神言靈は之れを「アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト」と教へ給ひ、「アマテラシマスマスアメノミナカヌシノカミ」とも「アマテラシマスマスアメオホミカミアマテラススメオホミカミアマテラスオホミカミ」とも「クニトコタチノミコト」とも「トラカミエミタメ」とも「アアヒガテンジンユウアイコウ」とも「アチメ」とも「アマミダ」とも「ナムアマミダブウ」とも教へ給へるところである。

聖文經小の八

## 地蔵佛界(七)

此のような神言靈を平常不斷に称へて居れば、一圓一音の示界が平常不斷に築成されつつあるのであるから、此の身は小さく狭く限られて居るようではあるが、小さく狭い其のままに広く大きな示界が現れて来るのである。

阿弥陀如来の浄土は西方に在ると云ふ。西又西で際涯無く西へ行くのだと云ふ。際限の無い西と云ふのは西であつて東で、東であつて西で、南であつて北で、北であつて南で、上であつて下で、下であつて上で、中央であつて十方で、十方であつて中央である。

故に西でもなければ東でもない、南でもなければ北でもない中央でもなければ上下でもないところの大宇大宙で、大宇大宙の大中心である。従つて十方世界で十萬億土で東西南北上下中外である。之れを十字架となすので白玉で皇で天皇で日本で神籙で統一魂神である。



絶対唯一の時間

無限の時間

無限球体積の時間

動く時間

動かざる時間

時間ならざる時間

# 宇氣比

多田山公秘稿

山外一塊土又是一圓光裡過客。

神の宇氣比に依るが故に、人間の身も神の完きが如く完全ならんと志し善悪邪正是非曲直を判別し得るに到るなり。

宇氣比の宇は極小の音、氣は産出にして箇體、比は日にして魂にして氷にして○にして◇にして田にして窓なれば、宇氣比とは極大極小の靈が結び成したる最大最小の神界樂土にして、又、其の主神にして司神にして狭霧にして伊吹にして三女神にして五男神にして天安河にして建速須佐之男にして月夜見月弓月讀命にして天照大御神にして御倉擧板神にして稻倉魂にして怪奇異靈の存在なり、大氣津比賣にして保食神にして豊受比賣にして、女にして芽にして目にして凹にして沃土樂地にして、

陰にして陽にして陰陽不測にして神なるなり、四象にして両儀にして太極にして無極にして極無極にして極大極小にして日止なる四象にして日月にして易なり。

和身魂にして幸身魂にして奇身魂にして咲身魂にして術魂にして、塩土翁なる九魂にして、大日本天皇たる荒身魂にして、眞身魂にして、生玉にして足玉にして玉積魂にして神魂にして高魂にして、底度久御魂にして津夫多都御魂にして阿波佐久御魂にして、大國魂にして、生嶋にして足嶋にして、大日本豊秋津根別にして、大八洲國にして、八神殿にして、八尋殿にして、天御柱にして國御柱にして、神世七代にして五代にして八代にして、八百萬魂にしてミタマなるなり。

御魂にして魂にして身魂にして箇體なる宇宙にして、日にして日神にして、月にして月讀命にして、黄泉幽界にして、明闇にして零にして、十なる十字架にして、白玉身にして緋色（ひ

かり）にして、天津神にして、國津神にして、天神地祇にして綿津見にして山祇にして、國常立にして天常立にして、國常立尊なる可美葦牙彦舅にてましますなり。

阿知米にして阿阿比賀天咩爾咩由宇阿伊固宇にてましますなり。

一二三四五六七八九十にして  
一二三四五六七八九十百千萬にてまします  
三十二人供人にして  
五供緒にして十種神寶にして三種神器にして三重子にして三貴子にして比咩にして比古にして神魔にして凹凸にして、如是にして如如にして如来にして、死生觀にして、生死遷流にして、不生滅にして、生不生にして滅不滅にして如如去来なりとは云へるなり。

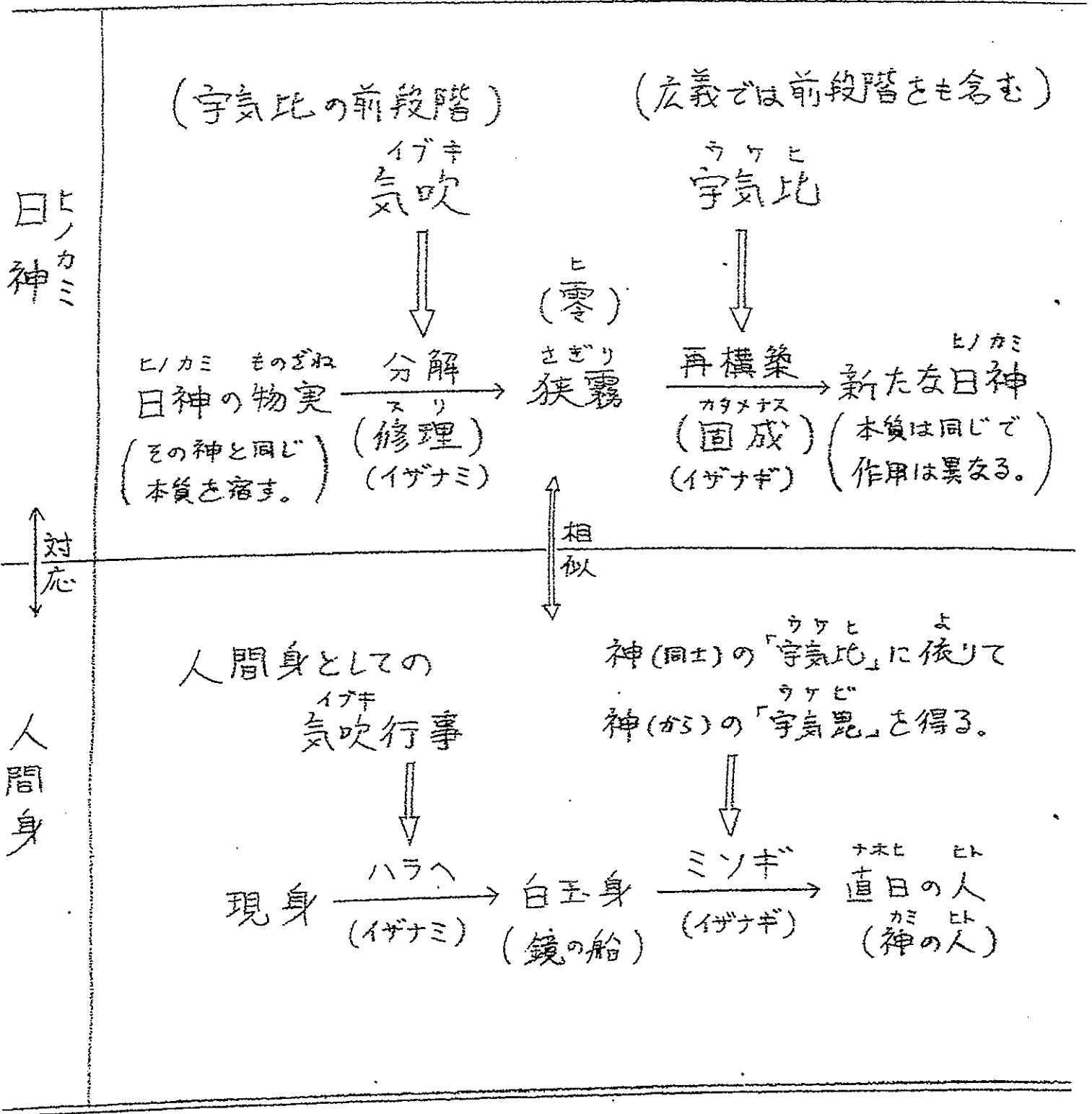
之れをヒフミなりと云ふなり

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリなりとは云へるなり。

以上

昭和十一年十一月十一日夜半

# 「イブキ」と「ウケヒ」



上段の用語は(幸) 149頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(-)より。



# 天鹿兒弓

多田山公秘稿

世上所傳、日文(ひふみ)なるものあり。

① 徳川氏執政時、平田篤胤、仙童寅吉より聞知、記録に止めて印行せるものは左の如し。

ヒフミヨイムナヤコトモチロ  
比布美與以牟奈耶古登毛智呂  
ラネシキルユ井ツワヌソヲタハ  
良禰志伎流由韋都和奴會袁哆波  
クメカウオエニサリヘテノマス  
玖米迦汗游曳爾佐理閉豆乃麻須  
アセエホレケ  
阿世惠保禮氣。

② 之れを一音一義の言靈となす。  
③ 佛者所云の六道輪廻との意なれば、因より区切無く、首尾も無きなり。  
④ 迷ひ又迷ひ、苦しみ又苦しみ、墮落又墮落、死又死、分散又分散なり。

散、底止するところ無きを教へたる言靈にして、一言主神(ヒトコトヌシノカミ)の司りましますところなり。

一言主神と称へまつるは葛城野神(かつらぎのかみ)の又名なれば太玉尊(ふとたまのみこと)の神徳を讚美したる日本民族傳承の言靈にして、稱へまつれる御名なり。

⑤ 日文とは『ひふみ』にして、日経身なると共に火踏なり。轉輾遷流の意なるなり。

⑥ 神恩昭昭  
神威赫灼  
神徳穆穆

⑦ 日月運行而倏忽俄然  
轉迷開悟之言靈。

⑧ 之は一音響。  
之是一圓相。  
如是言靈とは、

⑨ ヒフミヨイムナヤコノタリ  
ヤモモチチミテリ。  
是れなり。

⑩ 之れ一音に一義を有すると共に二十一音にて復一義なるもの最大にして最小の音なり。

日本民族傳承の神傳に『オトタナバタ』とは、此是神言(かみのことば)を讚美したるなり。佛者所云の妙音觀世音なり。梵音なり。

其の人を教へんが爲に形容して海潮音と呼ぶところ、即神音なるなり。

故に、古來絶えて之れを解説せず、唯一尊念奉稱したる而耳。

金鈴一振

梵鐘一打

火光一閃

忽然體得之是一音。

⑪ ひは日なり。火なり。靈なり。

⑫ 魂なり。一なり。極大なり。極小なり。

⑬ ふは経なり。經過なり。時置師(ときおかし)なり。変遷

⑭ 二なり。微細なり。小宇宙なり。

⑮ みは身なり。實なり。見なり。

⑯ 三なり。参進なり。退くと無きなり。分身なり。箇體なり。子女産出なり。

よは代なり。世なり。重なり。  
隔離なり。四なり。死なり。  
終息なり。

いは進なり。出なり。五なり。  
正なり。

むは結なり。群なり。集なり。

六なり。結實なり。結實分  
布蕃息傳播なり。

なは凧なり。和なり。平穩静寂

なり。七なり。塩土（しほ  
つち）なり。人間身なり。

やは彌なり。進なり。鋭なり。

矢なり。八なり。分割なり。

咲なり。笑なり。和樂なる

と共に死滅なり。生死一如

なり。

こは固なり。凝なり。結晶なり。

兒なり。

こは轉變遷離散なり。

のは野なり。平なり。原なり。

和樂なり。女徳なり。

たは高なり。足なり。顯なり。

現なり。

りは分散なり。殺害なり。征伐

なり。

やは足り満ちて産出分身する力

なり。

もは思なり。慕なり。

もは思慕戀愛なり。

ぢは血なり。散なり。分散なり。

ぢは千にして無際無涯なり。

みは身にして道なり。

ては照なり。赫灼なり。

りは分身なり。子女なり。箇體

なり。小宇宙なり。

之れを各音の表現する意義と

なす。

而して、二十一全音は宇宙構

成の眞理を表示せる 天御鏡尊

（あまのみかがみのみこと）の

神徳にして乾坤一音の神言靈な

ると共に魔類を調伏濟度救出し

て、神界樂土に誘導摂入するの

神音なり。

示（しん）音なり。

 音なり。

日なり。

日神（ひのかみ）なり。

一音響にして又一圓相なり。

三重體（さんぢうのたい）な

り。

二重用（にぢうのよう）なり。

四重示（しぢうのしん）なり。

五重示（ごぢうのしん）なり。

七重  （しち

ぢうのしん）なり

九重  （くぢ

うのしん）なり

是れを窮數となし又満數とな

す。

一二三四五六七八九十百千萬

となす。

阿阿比賀天畔爾畔由宇阿伊固

宇なるなり。

まきみのかがみ

魔澄鏡

以上

昭

和九年二月二十二日

2019.3.26.

一円一音瑤々琅々 秘稿「日本精神」より

<sup>じょう</sup>  
「瑤」という字は、部首が<sup>たまへん</sup>玉篇であることから解るとおり、  
<sup>たま</sup>  
玉の鳴る音を形容した文字であり、(漢和辞典、参照)

その意味においては「<sup>ろう</sup>琅」と同じである。

一方、「<sup>しょう</sup>昭」の字は、部首が<sup>ひ</sup>日であることから解るとおり、  
<sup>ひ</sup>  
日の光の明らかな<sup>さま</sup>様子を表現した文字である。

即ち、「昭々琅々」と言えば、光(一円)と音(一音)を  
それぞれに形容した表現となるが、「瑤々琅々」と書くと、  
もっぱら音の方だけを重ねて形容した表現となる。

とは言え、元々「一円相」も「一音響」も、無字宙を指し示す  
“ものたどえ”でしかないのだから、そこにどちらの形容句を付け  
足そうが、本質的な意味には何も変わりはない。

ここでは、個々の漢字の意味よりも、<sup>しょう</sup> 瑤 <sup>じょう</sup> 琅 <sup>ろう</sup> に共通の  
母音「オウ」(オ→ウ)の<sup>の</sup>コトマとしての意味を理解することが  
重要なのであろう。

幸ひのふいむなや(一)のたりおともちちみ

リノ平音ヲ數下ニテ算フレバ一ニ三四五六

七八九十百千萬ナル如ク此が火口氷靈魂

ニテおが經古舊過人ニテみか身心實徳

見充滿ニテよが代世能福節ニテいカ寝

正誠往去死來ニテ燒氣者未心が無ニテ衣

ガ華和布良者知凡ニテやカ矢彌嬰兒

ニテ(一)が(四)疑(四)ニテ(一)が兒竹箇體ニテ(一)の(一)が野

野地地其土ニテたが高隆秀麗ニテリが

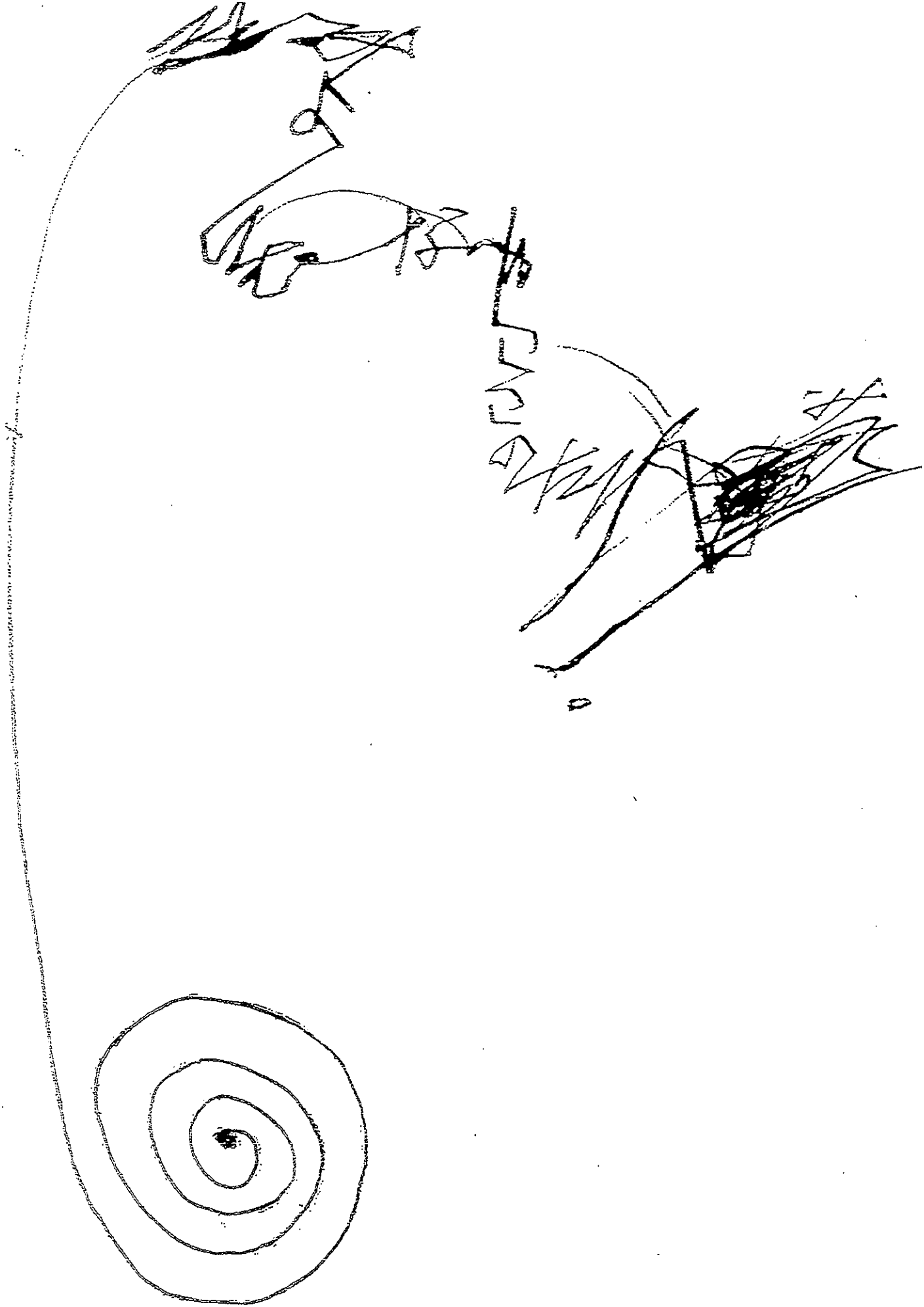
被壞ニテおが行止進退ニテもが思慕

もが戀愛ニテちが乳ニテ古が地ニテ

暗愚ニテて如星輝ニテリが調伏濟度

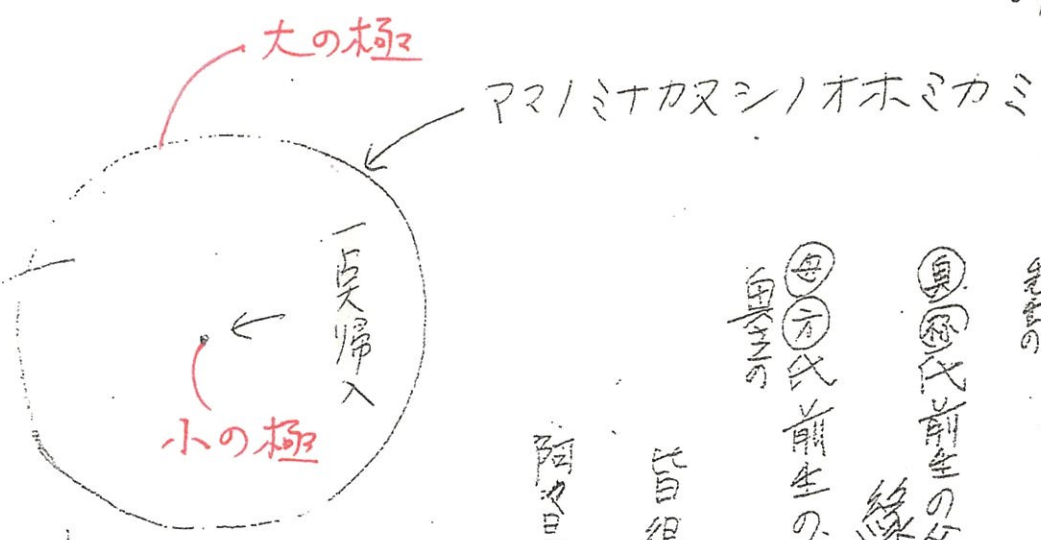
如ク





中心の一点を帰入することによって、  
大宇宙全体と、一個の統一体として、  
把握することができようになる。  
(幸.137頁、「唯一克」云々を参照)

オホミカミの  
先祖諸魂の  
慰霊のやり方



この丸は宇宙の  
大宇宙と一ははその中心を  
示し、一点を以て中心  
に入るを敬むるありませう。

各前の命は命の言にて  
頂くの命を以てありませう。

(毎月のみぎぎの時は)  
西の善大慈原の沖の瀬は  
汚れを被う穢の忌夜  
(夏越しの被は)  
水無月の夏越しに被一する人  
は千年の命延ぶとまう

阿彌目賀一上吳昭々環々

比旨得解脱

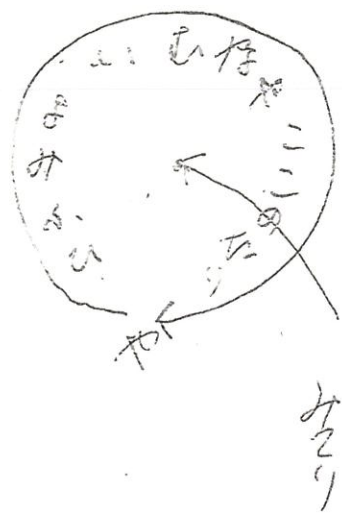
- 真宗氏前生の父母祖の京の魂
- 縁由諸有諸魂
- 母方氏前生の父母祖の京の魂
- 父方氏前生の父母祖の京の魂

記入方法

心身を清澄にして  
筆に受火

二十一秘言をとらへつつ

ひふ、かよ、い、む、な、や、こ、の、た、り、や  
ももちちちかこり



紙に受火と紙を返して  
目の上にかかけ、フーと  
息を吹きつけ、諸魂を  
一点帰入させよう。

アチメアチメアチメアチメア  
チメ。

ヒフミヨイムナヤココノタリ  
ヤモモチチミテリ。

アアヒガテンジンユウアイコ  
ウ。

八雲琴我が掻き鳴らす束の間  
を人こそ學べ身をば捧げて。

八雲琴我が掻き鳴らす神の聲  
神寄板に今日も昨日も。

フルコトノフミミチワケテワ  
ガヒクヤカミノヲゴトノコヲロ

コヲロニ。

天地の神にぞ祈る我が心大空  
の如くあるべく。

アチメアチメアチメアチメア  
チメ。

アメツチノカミノココロヲコ  
コロニテキツキナシタルアシハ  
ラノクニ。

波の音遠く聞こえて入江には  
人こそ集へ船出すらしも。

あさもよし城の上の宮は神な  
がら神のうけひて神しらすまに

アチメ オオオ。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。  
以上。

昭和十一年九月二十二日

大日本祓禊所 語部宮

交融通が斷絶して、牆壁徒に荆棘を植ゑ、溝渠大道に横はると云ふやうに、乾坤否塞の大不祥事が發つて來る。そこには、長幼の序も無くなるので、四時の順は亂れる。親子の愛も無くなるから、穀倉は空しくなる。夫婦の別も紊れるから、病室の空く時が無くなる。師弟の禮も忘れるから、上下相剋して讎敵は來り窺ふことにな。さう成つてからでは、所謂非常時で、相互に殺戮の慘劇を演出して、猛火の中に狂ひ、怒濤の裡に哭き號ぶのである。

瞋恚の火と溺情の水と。之を古老は、「二河」と呼んで居る。

忿怒瞋恚の火と、愛慾溺情の水との二河に隔てられて、人の子は、困窮苦悶の生に迷ひ、清涼溫和の死を忘れる。

墮在千年、二河深淵。救出彼岸、十四祕言。山裡山外、一點昭昭。妙音畫成、破馭廬嶋。

よしありと、ひとこそみらめ。としつきの、めぐるがままに。あめつちの、かみのうけひの。よるとなく、またひるとなく。ただしきを、すくなるみちを。かみまもり、まもりこそませ。そのときの、そのひのまもり。かのときの、かのよのまもり。よしありと、われもしるなり。かみのよの、かみのうけひて。かみながら、かみのうけびて。かみしらすまに。

神代の神の宇氣比と、惟神の神の宇氣毘と、日止の身の宇氣踏み行くがままに、神の世、神の國は築き成され



るので、その道をまた古老は、「白道」と呼んで居る。

「二河白道」。それは、一圓晃耀の太遮邇殿なので、人間世界一切の障礙は摧破せられ、天津罪、國津罪の限りも消滅して、神國樂園天界淨地が湧出し現成するので、戰國亂世の人人を救濟するには、最相應フサハしい行法義である。今、日本紀から其の例の一二を挙げますと、「天照大神の高天原に、素戔鳴尊が升りまして、種種罪を重ね、晝夜の判別もつかぬやうな常闇の國としてしまはれたので、八十萬の神が天安河に會合して、そのべき方法を相談された。深謀遠慮の上で、常世の長鳴鳥を集め、手力雄神、天兒屋命、天太玉命等が力をせ、天鈿女神の火處ホドヤキ燒、覆槽ウケトロコ置に依り、復、高天原は明けて、主の神を拜みまつることが出來た」とあるのがつ。次ぎには、「皇孫が天降ります時、八衢の神が居られたのに、八十萬の神たちは、それと應對が出來なかつた。天鈿女命が、詔せを受け、胸乳をあらはに、裳紐を臍の下に押し垂れて向ひ立たれた。すると、衢神が、の其の爲ぐさは何故かと問はれたので、問答の末、皇孫の天降ります道を開かれた」と記して、人に目勝マカてる鈿女の神事が、大道顯彰の最深最勝法であることを垂示せられてある。

と申しただけでは、どうお受取り下さるか存じませぬが、斯道宣明顯彰の方途は、必竟するに、大邪大惡大であつてはじめて達成することが出来る。不良少年を養育することが出來ぬやうでは、非常時局を安全に航行ることのできるものではない。との祖神垂示である。

神魔來往神魔園。今日明夜非否劫。時空一圓又一音。一朝一夕一點天。

# 幸253頁

「カミナガラ」は、「ヒ」がそのままに組み上げられてゆく  
プロセス  
過程、そのものを指す用語なので、

「<sup>カミナガラ</sup> <sup>カミ</sup> 権神の神」とは、そのようにして組み上げられた神のこと。

対して、「<sup>カミヨ</sup> <sup>カミ</sup> 神代の神」は、そのように組み上げられてはいない

実在、即ち「<sup>ヒ</sup> <sup>カミ</sup> 零の神」のことである。

無宇宙の<sup>ヒ</sup>零の神 (神代の神) — 宇宙比<sup>ヒ</sup>ウケヒ

<sup>カミ</sup>魂の神 - <sup>ヒ</sup>身の神 (権神の神) — 宇宙比<sup>ヒ</sup>ウケヒ

<sup>ヒト</sup>人間の身 — 宇宙<sup>ヒ</sup>踏む

(ウケ踏むことにより、ウケビを得る)

おほそらは、はれにはれたり。あしたづの、ちよやちよと、あまぢゆくこゑ。

(タイ)

と云ふ歌があるので、之を借りて、此の境を説明する一助と爲よう。

神代の神とは、「隱身」と古事記の傳へたところで、之を「コモリミ」と碓稻綺道秀先生から學んだが、コモリミとしては、いまだ天降り坐さざる別天神なりとの義で、鏡之船に身籠り居坐すの義で、それは、「澄み清みて明み切りたる」○海である。

人の身として之を仰げば、「カクリミ」にてまします。先師の「ミタママツリ」に、經無く緯無く始無く終無しと稱へたまへる「球體」である。球は是體。體は是球。

皆人が専心一意、天御中主大神の大御名を奉稱しつつあれば、其處に天地は發け、其處に高天原は明けて、主の神を拜みまつるべきである。其の主の神は、御一柱としては、天之御中主神と稱へまつられ、御三柱としては、アマノミナカヌシノカミ天之御中主神・クカミムスヒノカミ高御産巢日神・カミムスヒノカミ神産巢日神と稱へまつらるるのである。

あめなるや、あまのいはやど。こもりみの、かみのみすがた。くすしかも、あやしきかもな。ひふみよと、うけふみたれば、いつむゆな、やよここのへの、かみしらす。きみがまるやは、うちとみな、すみにすみたり。すみすみて、すみきりたれば、かくりみの、かみにこそませ。ひふみよい、むゆなやこなる。なりなりて、なりあはざるを、ふるべゆら、ゆらとをふるべ。ひふみよい、むゆなやことと、なりなりて、なりあまれば、ひとことの、かつらぎぬしや、ほむすびの、むすぶかみわぞ、てりにてりたる。

先師の全集十卷、無慮八千頁。然れども、此の「體」を傳ふるもの僅に數言。爲に讀者往往此の祕言を看過す

# ① 幸187頁 のリと

あめなるや～  
こもりみの～

コモリミ = カウリミ

コトアツカミ

ヒツヨ と うけあみたあは

アマツカミ

(ヒカミ)

イツムエナ ヤヨコノハ～

ヒツヨイ  
ムコヤコ なる

ヒツヨイ  
ムコヤコト と

なりなりて  
なりあはさるこ

(イザナミ)

なりなりて  
なりあまみんは

(イザナギ)

~~~~~

ほむすびの  
むすぶ神輿を  
てりにてりたる

ウツカミ

(ウツカミ)

↓